

『過労死防止学会誌』の「これまで」と「これから」

高田 好章

過労死防止学会 事務局・編集委員
基礎経済科学研究所所員

Yoshiaki TAKADA Past and Future about "Journal of Japan Society for Karoshi Research"

1. 『過労死防止学会誌』のこれまで
創刊への歩み

『過労死防止学会誌』の創刊号(2020年度)は、2021年3月20日付で発行されました。しかし、私にとっては初めての学会誌の編集作業であり、また依頼原稿の提出遅延もあり、実際に会員の方々へ発送したのは遅れること2カ月、5月中旬でした。学会誌創刊の経緯は創刊号(第1号)の「編集後記」に記載しましたが、以下のような事がありました。

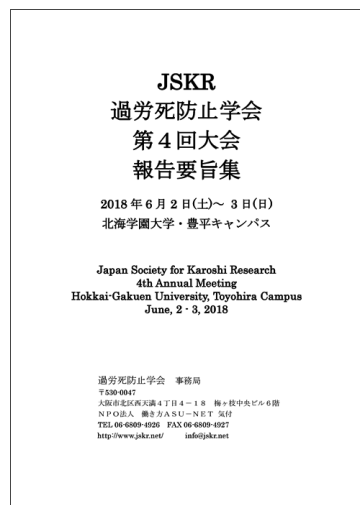
2020年5月に開催を予定していた第6回大会が、コロナ禍により9月に延期され、分科会を取りやめて「特別シンポジウム」と「共通論題」を一日で行う、という規模を縮小したものになりました。会場への参加者も報告者・討論者・スタッフ等の最少人数とし、会場から会員の皆さんにはオンライン配信し、一部の報告はオンライン報告としました。それまでの大会では会場で『報告要旨集』の冊子を配布していましたが、この大会では「報告要旨」をオンラインで配布し、大会後に「大会報告集」を作成する予定でした。

そこで大会後に報告と質疑応答の反訳(文字起こし)の作業に入りましたが、ここで事態が大きく変化したのです。10月下旬に代表幹事の黒田兼一さんから私の携帯に電話がありました。車を運転中で慌てて近くのショッピングセンターの駐車場に止め、そこで長時間話し合いました。黒田さんからの提案は、単なる「大会報告集」から発展して『学会誌』を創刊する、というものでした。黒田さんからの『学会誌』創刊への熱い思いを車の中で聴きました。これからの学会の行く道を、黒田さんは明確に示されたのです。それが新たな『学会誌』創刊への道でした。1時間以上話し合ったでしょうか、私も今後の学会の進む方向、新たな『過労死防止学会誌』の創刊・発行を決意しました。

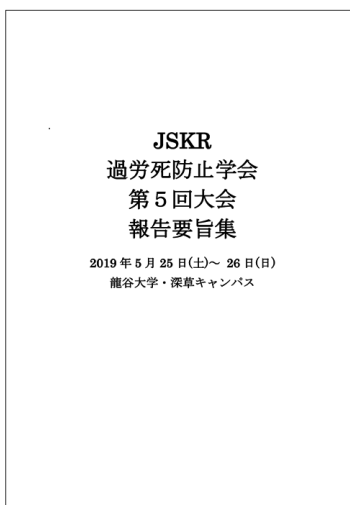
第1号の発刊

それから『過労死防止学会誌』への本格的な編集作業が始まりました。大会報告の反訳を掲載するだけでなく、報告者への論文の執筆依頼、また会員の方々にも投稿を呼びかけました。

そもそも、この学会の会則には、事業として「出版物の編集・刊行」、また会員からの「学会刊行物への投稿」、会員への「学会刊行物の配布」が、設立当初から明記されていたのです。ISSN(国際標準逐次刊行物番号)も取得しましたが、この時点では、まだ編集委員会は組織されておらず、急な対応として常任幹事会が「編集・発行」元となり、「投稿規定」も制定しました。印刷会社との交渉、会員への発送方法等、何事も初めてことで、知り合いの出版社の方から色々と教えていただきました。



第4回大会報告要旨集(2018年度)



第5回大会報告要旨集(2019年度)

ISSN 2436-2298

過労死防止学会誌 第1号(2020年度)
Journal of Japan Society for Karoshi Research No.1 (2020)

過労死等防止法制定から6年
一果たして過労死・過労自殺は減少したのかー

論文

佐々木 昭三 日本で過労死をなくしてゆくことと国際労働基準
川人 博 電通事件・働き方改革により、職場は変わったか？
粥川裕平 過労死防止法制定・施行から9年、増え続けている若者の自殺予防
～原因分析と展望～
天笠 崇 過労死等防止法制定から9年、ハラスメント自殺事例とその対策
～ハラスメントによる精神障害～
坂 至正 「岐阜過労死をなくす会」の設立と現在の活動について
トヨタシステムと労災・過労死・自殺
～40年余のトヨタ研究を振り返って～
松本実敏 コンビニ時短問題の経緯と問題点
深澤佳人 「その働き方、考えましょう」と訴えます
～A「大咬み公務外取組」B「損害賠償請求」C「うつ公務外取組」～
三隅達也 全国の特定機能病院の36協定で定める
医師の延長労働時間の現状と課題
伊佐地 修一 公務災害訴訟、勝利までのあゆみ
宗光美千代 客室乗務員の職場の特徴、及び
コロナ禍におけるあらたなストレスとバハラの実際

研究ノート

内藤 忍 ハラスメント関連法の改正の内容とその課題
鈴木明男 「自治体への要請行動を通じて過労死ゼロ都市宣言」を
実現する取り組み

三浦 勲 市バス運転士 公営認定までの経過と報告
中村一三 トヨタ社員過労自殺・労災認定裁判からの報告

報告および討論

過労死等防止法制定から9年、果たして過労死・過労自殺は減少したのか
報告 佐々木昭三 川人 博 粥川 裕平
過労死等防止法制定から9年、ハラスメント自殺事例とその対策
報告 天笠 崇 伊佐間佳子 水野幹男 内藤 忍

過労死の実態・原因・背景の調査研究、効果的な防止対策を発信
過労死防止学会 Japan Society for Karoshi Research

過労死防止学会誌 第1号 (2020年度)

ISSN 2436-2298

過労死防止学会誌
第2号(2021年度)
Journal of Japan Society for Karoshi Research No.2 (2021)

過労死根絶に向けて、現状と課題
ー ハラスメント防止と「防止大綱」再改訂 ー

特集 職場のハラスメント防止法を巡る国際的動向と日本の課題
大和田敢太 職場からハラスメントも過労死もなくなったかに
イム・サンヒョク 韓国の職場内ハラスメント現象と課題
坂倉昇平 「使い潰し」の職場においてハラスメントからたらす労働者の従属化
猿田正機 トヨタシステムと労災・過労死・自殺
長井偉訓 共通論題に関する報告の論点と今後の課題

研究論文

高橋正也 過労死防止法制定7年、現状とこれからの課題
岩城 慎 過労死をなくすために、過労死防止法・大綱・協議会をどう活用するか
黒田兼一 過労死等防止対策推進法と防止対策大綱の意義と課題
川人 博 過労死研究の経過と現代の課題

研究ノート・その他

寺西実子 大綱再改訂への家族の想いと願い
桜井善行 「過労死防止啓発授業」を通じた生徒の意識への接近
清家智美 教員の長時間・過重労働の実態—教育現場からの報告と問題提起—
手島浩太・村上諒・横山智彦・土谷良樹
長時間労働による健康への影響と現状改善に向けた問題提起
寺内宏伸 過労死防止と労働時間短縮 ～週40時間制の反省～
宗光美千代 A社—Tさんの過労死問題を考える
奥平隆・生井良江 航空労働者のコロナ禍での労働文化とメンタルヘルス
坂口真澄 客室乗務員のストレスと疲労 マトリックスからの一考察
森崎めぐみ 芸能従事者の安全衛生と労働過重性の実態
村尾幸太郎 過労死と義理 ～「義理を欠く実践」はいかに可能か～
本多雄二 中弱判定された精神障害の治療期間の長期化と解雇問題について
長井偉訓・細川孝 特別分科会「啓発授業の現状と課題」に関する論点整理

過労死の実態・原因・背景の調査研究、効果的な防止対策を発信
過労死防止学会 Japan Society for Karoshi Research

過労死防止学会誌 第2号 (2021年度)

当初予定より2カ月発行が遅れましたが、『過労死防止学会誌』創刊号(第1号、2020年度)は、メインテーマを「過労死等防止法制定から6年 一果たして過労死・過労自殺は減少したのかー」としました。また、論稿だけでなく、この学会の大会記録、過労死防止法・大綱などの資料も掲載し、過労死防止運動への一助となる構成としました。出来上がった冊子は会員の皆様に送り、また厚生労働省の過労死防止関係部署や幾つかの研究機関に送り、国会図書館にも納本しました。発行数は400部でしたが、この創刊号には毎年注文が少しずつ入り、嬉しいことに昨年(2024年)6月の注文をもって在庫がなくなりました。

第2号の刊行

続く第2号(2021年度)では、第7回大会を特集として、メインテーマを「過労死根絶に向けて、現状と課題ーハラスメント防止と『防止大綱』再改訂ー」として、2022年3月10日付で発行しました。この号では、大会特集だけでなく、多くの会員から研究論文・研究ノートなどの原稿の投稿があり、一歩進んだ号とすることができました。この号の編集では「学会誌編集委員会(準備会)」を設置し、新たな編集体制で作業を行い、校正などの編集作業ではとても助かりました。奥付には、「編集 編集委員会」、「発行 常任幹事会」と記載することとなりました。「編集後記」には、書き手を増やすこと、編集委員会の正式発足による編集体制の充実、文献情報・過労死防止をめぐる年間動向情報などの課題を記載し、「この冊子を読めば過労死防止関係の概要が分かる」とまで書いています。

第3号の刊行

第3号(2022年度)では、本格的に編集委員会の活動が始まりました。「編集委員会規程」を制定し、委員の拡充、編集体制や編集方針の見直しを行いました。具体的には、執筆者からの原稿をそのまま掲載するのではなく、編集委員が手分けして提出された原稿への「校閲」を行い、読者がより読みやすくなるよう、文章表現・図表など校閲意見を執筆者に伝えました。この校閲

過労死防止学会誌

第3号(2022年度)

Journal of Japan Society for Karoshi Research No.3 (2022)

ISSN 2436-2298

新型コロナ禍における長時間労働と過労死問題

特集1 過労死・過労自殺の現状と課題

江口 尚 過労死、過労自殺対策における産業保健活動上の今日的課題
井上幸紀 過労死、過労自殺と関連する個人や社会の要因
清山 玲 学校教員の過労死・過労自殺の現状といま求められる働き方改革
[座長発言] 天笠 崇 [予定討論] 土谷良樹・天笠 崇・色部 祐

特集2 COVID-19災禍と長時間労働

竹信三恵子 コロナ禍と女性労働～問われる「見えない過労」対策
山本民子 新型コロナ禍での自治体職員の労働実態と課題
杉村和美 コロナ禍でのメディア関連フリーランスの実態と課題
吉中丈志 コロナ禍での医師労働の諸相と働き方改革
[予定討論] 石井まこと・早川佐知子

研究論文・その他

寺内宏伸 (仮説と検証) 三六協定制は米国公正労働基準法に由来するか？
中野清美 過労死家族と過労死被害
本多建二 過労死ゼロ社会の構築に向けて
過労死等防止対策ホームページの統一の基準の提案
奥平 隆 『コロナ禍』における航空労働者の実態と課題
～現場労働者の急激なストレス増加についての調査と考察～
大塚泰正・他 国内航空会社勤務の客室乗務員のストレスとその対処
宗光美千代 客室乗務員の現状と国際比較、労災等について
岡村晴美 ハラスメントを構造から理解する～パワーハラスメント、いじめ、DV
尾林芳匡・白神優理子・中江奈津子 海外勤務者の過労死 現状と課題
森崎めぐみ 文化芸術・芸術分野のハラスメントの実態と課題
坂下史生 教育現場におけるペーパーワークと長時間労働
長井偉訓 [書評]ジェフリー・フェアーラー著『ブラック職場があなたを殺す』

過労死の実態・原因・背景の調査研究、効果的な防止対策を発信
過労死防止学会 Japan Society for Karoshi Research

過労死防止学会誌 第3号 (2022年度)

者の意見は強制するものではなく参考意見とし、その対応は執筆者にお任せしました。結果的には、これらの参考意見に積極的に対応していただき、よりよい原稿とすることができました。編集委員会規程には「査読」の実施が明記されていますが、現実には時期尚早とし、今後の課題としています。

このように、第3号では編集体制をある程度確立できた、と思っています。それに加えて、学会誌発行の1年後に、学会のホームページに学会誌を公開することにしました。通常、他の学会では学会誌を3年後に公開する等の対応していますが、当学会は過労死防止への一環として学会誌を発行している、という目的があります。出来るだけ時期を早くに学会誌を公開し、多くの人々に論稿を読んでいただきたい、ということで発行の1年後に公開しています。2023年3月に、第1号および第2号を学会のホームページに公開いたしました。今後も、毎年3月には前年度の学会誌をホームページに公開しています。

第4号の刊行

第4号(2023年度)では、ここではじめて冊子に表題を付けませんでした。第3号では特集を2つ組みましたが、この号では、第9回大会の「特別講演」・「共通論題」の報告者の方々からの提出原稿が少なく、特集は「地方公務員の長時間労働」問題のみで、それも、2つの論稿の掲載となっています。大会報告と学会誌との連携に課題が残りましたが、分科会報告者や会員からの投稿が一定程度あり、まとまった学会誌とすることができました。

この号での特徴は、各論稿に英文タイトルを掲載し、また英文目次を追加し、裏表紙にも掲載しました。これは、編集委員会において話し合っ、新たに決めた編集方針です。これまでも英文の学会誌名「Journal of Japan Society for Karoshi Research」を表紙や奥付に明記していました。「英文タイトル」と「英文サマリー」が今後の課題として常任理事会や編集委員会で話し合ってきました。その結果、この第4号で初めて英文タイトルを追記することとなりました。執筆者に英文タイトルをお願いするとともに、編集委員会でも編集委員が英文タイトル案を提示するなどの支援を行いました。さらに最終案が決まるまで編集委員会で議論し、外部の方のご協力も得て、掲載することができました。ここでも一歩ですが、学会誌を進めることができました。

2. 『過労死防止学会誌』のこれから

学会誌の今後の課題と目指すべき目標を、記載しておきます。

学会誌の今後の課題

今後の課題としては、4つあります。

一つ目は、今後も会員からの投稿を増やしていくことです。創刊号から会員の皆様に多くの論稿を投稿していただいておりますが、さらに多くの会員の皆様からの投稿が、この学会誌を育てていく糧となります。

二つ目は、第4号で「英文タイトル」を論稿に添えましたが、さらに次の目標として、各論稿に「サマリー(要約)」を掲載することです。和文のサマリーだけでなく、近年多くの学会誌が行っている「英文サマリー」の掲載です。このことにより、日本だけでなく、海外への情報発信にも寄与する

特集 地方公務員の長時間過密労働とその対策

- 山口真美 地方公務員の長時間労働 ～労基法33条問題と特例業務
上林陽治 会計年度任用職員の公務災害補償 ―死んでからも非正規なのか―

研究論文・その他

- 竹島 正 地域の自殺予防・自死遺族支援の視点からみた
過労死・過労自殺の予防
川人 博 労働者協同組合における過労死が問いかけるもの
―斎藤幸平氏の労働者協同組合賛美論・社会運動論を批判する―
土谷良樹 医師意見書(心臓・脳疾患による突然死など)の記載について
田中與念子 医師の長時間労働と働き方改革 ―日本の医療の未来―
奥平 隆 係争中の航空機客室乗務員(CA)労災認定をめぐる論点について
森崎めぐみ・佐藤大和・加藤みはる・高橋幸美
芸能従事者の労災と安全衛生の現況と課題解決の取り組み
長井律訓・高橋幸美・久保直純・中川香代
高知大学における「過労死等防止啓発授業」の実践事例の紹介
櫻井善行 過労死等防止啓発授業の実践を振り返って
～4年間の実践から見えてきたものと5年目以降の課題～
寺内宏伸 過労死と2024年問題について
長井律訓 [書評] 妹尾昌俊・工藤祥子著
『先生を、死なせない、一教師の過労死を防ぐために、今、できること』
本多雄二 労災隠しの実態と労災指定医療機関の問題、
精神障害者の労災認定について

Special Issue

- Long Working Hours and Excess Workloads of Local Public Employees and its Preventive Measures
Naomi YAMAGUCHI
Long Working Hours of Local Public Servants - Issues about Labor Standards Act Article 33
and Public Servants' Special Duties not Subject to Overtime Work Regulations
Yoji KAMBAYASHI
Local Government Employees' Accident Compensation for Non-Regular Public Workers
― Its So Discriminatory ―

Research Papers and Others

- Tadashi TAKESHIMA
Preventing Death and Suicide from Overwork: From the Viewpoint of Suicide Prevention
and Survivor Support in the Community
Hiroshi KAWAHITO
Karoshi (Deaths from Overwork) in Workers' Cooperatives - An Argument Against
Kohei SAITO Praising Workers' Cooperatives and Social Movements
Yoshiki TSUCHIYA Issues about Written Opinion for KAROSHI by a Medical Doctor
Yonko TANAKA
Physician Long Working Hours and Workstyle Reforms -Contemplating the Future of Healthcare in Japan
Takashi OKUDAIRA
Regarding the Disputed Issue Regarding Certification of Industrial Disease for Aircraft
Cabin Attendants (CA)
Megumi MORISAKI / Yamato SATO / Mihar KATO / Yukimi TAKAHASHI
Current Situation of Workplace Injuries and Health and Safety of Arts and Entertainment
Workers and Initiatives to Resolve Issues
Yoritoshi NAGAI / Yukimi TAKAHASHI/ Naozumi KUBO / Kayo NAKAGAWA
Report on a Practical Case of "The Classes to Raise Awareness for KAROSHI Prevention"
at Kochi University
Yoshiaki SAKURAI
Reflections on the Practice of "The Classes to Raise Awareness for KAROSHI Prevention"
from Four Years of the Practice and Challenges Beyond
Hironobu TERAUCHI Karoshi and the Year 2024 Problem
Yoritoshi NAGAI Book Review:
Masatoshi SENOO and Sachiko KUDO
Don't Let Teachers Die: What We Can Do Now to Prevent KAROSHI of Teachers
Yuji HONDA
The Reality of Concealment of Work-Related Accidents, the Problem of Designated Medical
Institutions for Work-Related Accidents, and the Problem of Recognition of Work-Related
Accidents for Mental Disorders

過労死の実態・原因・背景の調査研究、効果的な防止対策を発信
過労死防止学会

Japan Society for Karoshi Research

過労死防止学会誌 第4号(2023年度) ※表・裏表紙

こととなります。編集委員会では、すでにこの課題に対する議論を行っているところです。

三つ目は、「査読」の実施です。査読とは、学会誌へ投稿された論稿に対して、それを学会誌に掲載するかどうか、第三者が精読して掲載の可否を判定する仕組みです。査読により掲載可の判定が出た論稿は、一定の評価が付与され、執筆者にとっては研究者としての実績となります。編集委員会規程の第2条には、査読の実施が明記されていますが、査読を行う際の体制づくりが必要です。現在は「校閲」を行っていますが、「査読」を次の目標としています。

四つ目は、過労死関係の文献、新聞や雑誌の記事など、過労死をめぐる年間動向を検索できる情報を網羅して掲載することです。これがあれば、後にこの一年間に何があったのか分かります。

今、この『過労防止学会誌』第5号(2024年度)を編集委員会において編集を行っています。第5号の執筆者の多くの原稿には、掲載する「英文タイトル」が予め記載されていて、さらに「英文サマリー」を添えられている原稿が複数あり、日本の方々だけではなく、海外の方々にも読んでいただける『学会誌』として、一歩ずつですが、目標に向かって進んでいます。

学会誌の目指すべき目標

この学会誌を読めば過労死防止関連の概要が分かる、いつでも知りたい情報が掲載されている、そのような冊子であるということが、この学会誌の目標です。

さらに、この学会誌が日本で、また世界で「過労死をなくす運動」への一助となり、「この学会が必要ではなくなること」、これがこの学会・学会誌の最終目標です。